

第11回

第2章 人間としての自覚—哲学・宗教・芸術

キリスト教 ～神の愛に生きる～

今回学ぶこと

『旧約聖書』に示された神や律法のありかたを、イエスは新たに解釈し直した。それはどのような解釈であったのか、イエスのいくつかの例えばなしをもとに、神の愛（アガペー）を軸にとらえてみる。そして欧米人のものの考え方の基礎を形づくる、キリスト教成立のいきさつを知っておく。



講師

和田倫明

■ ■ イエスの思想 ■ ■

イエスの言行は、『新約聖書』冒頭に収められている四つの「福音書」に現れている。『旧約聖書』の世界では「おそろしい」存在であった神を、イエスは「愛」の神としてとらえ直した。神の愛（アガペー）は、無差別・無償の愛である。その神の愛にならって、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして」つまり全身全霊をかけて神を愛すること（神への愛）と、「自分を愛するように」隣人を愛すること（隣人愛）との二つが、根本律法とされた。

律法も解釈しなおされた。「安息日は人のためにあるのであって、人が安息日のためにあるのではない」と言って、安息日といえども働かざるを得ないような、貧しい人こそ、神は愛していると説いた。偽善者とは違って、そういう人こそ、自らの罪の深さに向き合い、心からの悔い改めによって神の許しを得ることができるのである。

■ ■ キリスト教の成立 ■ ■

イエスは、従来の律法を破壊するものではなく、むしろそれを完成するためにきたのだと言ったが、当時の保守層には到底受け入れられるものではなく、反発を受けて告発され、十字架の刑に処せられることとなった。

そこで、処刑され埋葬されたイエスが、復活して人々の前に姿を現し、やがてそのまま天に上げられていったという、復活昇天の信仰が広がった。それこそが、イエスは預言されていた救世主（メシア、キリスト）であることの証であるとして、キリスト教が生まれた。キリスト教は、パウロたちの働きによってローマ帝国領内に拡大した。

■ ■ ローマ帝国とキリスト教 ■ ■

ローマ帝国は、最初のうちはキリスト教を弾圧したが、やがてコンスタンティヌス帝により公認され、テオドシウス帝の時には国教化された。神、イエス・キリスト、聖霊が同じものの三つのあらわれであるとする三位一体説など、教義が統一されていった。その働きが大きかったのがアウグスティヌスであった。

ヨーロッパに広がったゲルマン民族諸国家も、正統派のキリスト教を受け入れ、中世ヨーロッパの体制がつくられていった。

◆ コラム ◆

『新約聖書』の最後に収められている「ヨハネの黙示録」は、他の部分とは明らかに異質で、予備知識なしに読むとその異様に驚かされる。これは、ヨハネという人物（「ヨハネによる福音書」の編纂者とは別人）が「幻視」したという、世界の終わりの様子をつづったものである。「黙示録 apocalypse」というタイトルそのものや、その中で描かれる「ハルマゲドン」（最後の戦い）や、「獣の数字」（666。ヨハネの黙示録には非常に多くの数字が象徴的にちりばめられている）などは、文学や映画などに多用されてきた。福音書などが欧米文化の道徳性に与えた影響の大きさはいうまでもないが、黙示録が欧米の文化の想像力に与えた影響もまた大きい。